お客様各位

元気通信

全米日本酒歓評会　「ジョイ・オブ・サケ」　世界に誇る日本酒だい！

こんにちは！まいどお馴染み（？）サーマルタンクの新洋技研工業です。

いやぁ～、行って良かった！・・・ってどこへなんだ？！　実は永年？の夢だった、全米日本酒歓評会の一般公開「ジョイ・オブ・サケ」へ行ってきたのです。

今回で第８回目を数え、今年は８月にホノルル、９月にニューヨーク、そして一〇月にサンフランシスコの三ヶ所で開催されます。で、私は８月のホノルル開催に参加させていただきました。ハワイは日系３世、４世も多く、また諸外国から移り住んでいるため様々なお国の人たちがいました。会場はとても広く、参加した人々の楽しそうな笑い声、話し声で溢れ、プラカップを手にして、出品されたお酒を最初はスポイトでちゃんときき猪口から汲んでいたのが料理を食べ、酔いが回るにつれてえい！面倒だ！とばかりに猪口から直接プラカップに入れたり並べられている瓶から注いだりしている人もいました。

私はハワイ在住の知人も含め４名で参加したのですが、日本酒の実に様々な味わいに、ハワイ在住の知人は大喜びしていました。またその知人と交流のある人たちも参加していて、その陽気さにしばし圧倒されてしまいました。日本のノリとは全然違う！

会場ではお取引先の蔵元さん方にお会いしてご挨拶させていただいたのですが、中には「なんでこんなところにいるのぉ？ここは日本か？」なんてちょっとビックリもされてしまいました。

確かに直接関わりはないかもしれませんが、お世話になっている業界の状況や海外における日本酒の可能性を肌で感じること、勉強することはとても大切なことだと思っています。（もっともただ単に酒好きとも言われますが・・・・汗）髪の色、目の色、話す言葉は違うけれど、おいしいお酒と料理の前ではみな笑顔で心が通じ合う。なんと平和的な外交でしょうか！

このような活動が諸外国でメジャーになっていくことによって、再び日本においても日本酒に目が向けられていくのではないかと思います。是非また参加させていただきたいと思いました。

今回の参加にあたり、お世話になった仲野社長さまに、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

酒蔵さんとの長ーいおつきあい

第 18 話

取締役会長　大辻　英郎

衝撃的ニュースが続いて、到頭米の事件まできて仕舞いました。どうしてこんなに浅ましい人間が増えてきたのか。当たり前ですね。教育の世界から汚れているのだから。

少し己を正す必要があるようです。

清めのお酒とお塩を撒いて、座禅をして天の声を聞くことにしませんか。黙想を 30 分、人に喜びを与える思念を 30 分、会社の経営計画も達成できるヒントが生まれ、社員の素晴らしさも見えて技術力も向上し、良き麹ができ、酵母がピチピチと働き、美味しい製品につながり、お客様が喜こび、受注が増え、利益があがり、社長も、社員も、家族も、皆が喜び今までの苦しみは何んだったのかと思う。

こんな人生を送りたい。

夢ではなく実現します。

人に喜びを与える黙想を続けるならば。

己が変われば、周りも変わる。真の言葉と思います。それに等しい経営をされて 50 年素晴らしい社史を先日頂戴しました。

皆様方おなじみの機器組合の姫路の第一工業株式会社　先代社長と現社長　是非お読みになることをおすすめします。

次号へつづく

日本の野鳥シリーズ　〇〇ビルのハヤブサ

技術営業部　佐藤　弘

タカなど稀少種の巣を見付けても場所を口外しない、周りの人はあれこれ訊かないのが鳥キチのマナーだ。理由は二つあって、例え遥か遠くからの観察でも鳥には監視される圧力になる事、そして話を聞きつけた密猟者に巣が荒らされる事を防ぐ為だ。その点、断崖の岩棚に営巣するハヤブサに後者の心配は全く無用だ。ヒナの密猟に行って転落したら自業自得を絵に描いた様だし、豆腐の角に頭ァ打って死ぬ程に情けないから手を出す物好きはいない。

本種が崖に営巣する事には他にも利点がある。先ず、吹きつける風が崖に当たれば上昇気流になり、無風でも崖が陽に温められれば上昇気流が発生するなど、発進・加速が楽だ。次に、眼下を飛ぶ獲物の鳥に高度差を利用した急降下の高速で追いつき捕捉できる。失敗しても充分スピードがあるから、直ちに急上昇・反転して態勢をたてなおし第二撃更に第三撃をかけられる。

本編第二話のミサゴは 1kg 超の鯉を 40km 先の巣迄運ぶ遠征型だが、本種は食住接近型らしい。長年佐渡の海岸で本種を観ている K 氏に、いったい沖あいどれくらい迄獲物を追跡するか尋ねた。深追いせず、肉眼で本種と判別できるせいぜい 2～300m、仕留めた獲物の運搬がシンドイのだろうと言う明快な答えだった。なる程、巣は高所にあるし鷲掴みにした獲物の空気抵抗もあって、その辺りが限界なのかも知れない。それにおそらくこれが最大の理由と考えるが、獲物と同じ高度まで下がれば相手とほぼ等速になり、狩りは先ず成功しない。急降下攻撃できなければただの鳥でしかない。

K 氏は、佐渡では本種が増えているらしく、空いていた崖に若い番いが営巣を始めたという。絶滅危惧種だからご同慶の至りだ。実は、県内某ビル外壁の窪みが彼らには岩棚に見えるらしく、親離れ間もない様な若い番いが営巣を始めた。今は大ベテランが見守っているが、若すぎてここ数年まだ繁殖には至っていないらしい。知る人ぞ知る石川県のビルに先を越された。

新潟県のそのビルは結構話題性のある建物だが、この先繁殖が成功しても大ベテランはそれを絶対に公表しないと確信する。

と結んだ後で、あと先考えない愛鳥家が情報を流し、この 6 月地元民放テレビに巣立ち間近の様子をスッパ抜かれた。興味本位の素人写真家達が、その親子の狩り場をウロつかないか気掛かりだ。

お客さんの一番喜ぶんはな、『期待以上だった時』やねん・・・

なぜか関西弁を話す、おかしなゾウの姿の神様「ガネーシャ」と、何をやっても続かずダメな主人公が織りなす、笑いと涙と感動の自己啓発本！！

「夢をかなえるゾウ」

著者：水野　敬也　飛鳥新社

「おい、起きろや」

聞きなれない声に目を覚ました僕は、眠気で重いまぶたをゆっくりと持ち上げた瞬間、眼球が飛び出るかと思うくらいの衝撃を受けた。　なんだ、コイツは！・・・・続きは本を是非お読み下さい！（ドラマ化も決定しているようですが、その前に読まれることをお勧めします！！）

一瞬を撮る　エッセイ

生産資材主任　島貫　修一

気付かれないように素早くカメラ（デジタル一眼レフ）を縦位置に構える。ファインダーを見ながらズームの画角と全体の構図を決め、同時に被写体と背景の距離の差・動きの速さ・明暗のコントラストを計算し、シャッター速度と絞り値を設定する。そしてシャッター半押しでベビーバギーにピントを合わせ、狙ったその瞬間を待つ。長野市の善光寺は全国から集まった観光客で大いに賑わっていた。お賽銭を投げて手を合わせている夫婦、線香の煙をなすり付けあっている家族、おみくじを真剣に読んでいるカップルなどそれぞれに願い事を託している。そんな善男善女の群れから離れて本堂の東側へ向かって歩いていたら、正面階段の影でたたずむ親子に目が留まった。日陰に入っても汗ばむ暑さの中で、バギーで眠る赤ちゃんに母親がうちわで風を送っている。母親も自分自身に風を当てたいぐらい暑いはずだが、懸命に赤ちゃんを扇いでいる。今もしも彼女が願い事をしているとすれば、それは赤ちゃんが気持ち良く眠ってくれることだろう。そんな想いが通じているのか赤ちゃんはぐっすりと眠っている。このささやかだけどとても大切な願いを表すために、うちわが最も高く上がった一瞬を捉えてシャッターを押した。